

# 毛利貞斎『増続大広益会玉篇大全』 の合口拗音ハ表記について

佐藤 進

## 一 漢字音の合口拗音ハ表記

本論で扱うのは、漢字の日本漢字音、いわゆる音読みのなかに見られる合口拗音のカナ表記にかかわる問題である。

拗音の現代の表記では「キャ・キュ・キョ」のように小さい「ヤ・ユ・ヨ」を用いる。過去にさかのぼると、ヤ行の拗音のほかに、「菓子クワシ」「三月サングワツ」のようにワ行の拗音があった（つい先ごろまでは方言でそのように発音されたという）。このヤ行拗音を開拗音、ワ行拗音を合拗音という（日本語学会 2018）。合拗音は明治に入ると拗音性を失い、「菓子カシ」「三月サンガツ」のように直音になってしまった。

開口合口の内容は中国音韻学でも使う用語であるが、中国音韻学の開口合口と、日本語学で使う開口合口とはそのまま重なり合うものではない。しかしながら、中国音韻学の合口と切り離して扱うのは、漢字音の由来等を論ずる際の手がかりを失うことになるので、本論では中国音韻学の合口の枠組みを利用した<sup>(注1)</sup>。単に合拗音と言わずに、合口拗音という所以である。

上に示したように、合口拗音はワ行拗音であるというのが一般的であるが、ワを使うほかにハを使うことがある。合口拗音ハ表記は、日本の古字

書などに見えるのであるが、そこに記述された和訓の研究は多数の積み重ねがある一方、漢字音に関することについては手薄であり、本格的に論じられることはほとんどない。漢字音拗音のハ表記は、訓読み、すなわち和語の「いわ(岩)」をかつて「いは」とかな表記したことは別の問題であって、決して同日に談ずべきことではない。

室町時代一五八九年に、キリシタンの手によって成立刊行された辞書『落葉集』では、「光くハう」「果くハ」「月ぐハつ」などのように、一貫して「ハ」表記が使われた(ハはカタカナではなく、「は」の変体仮名である)。その理由について筆者は、第一に、当時の「ハ」はすばめた両唇摩擦で発音されたこと。第二に、『日葡辞書』などのローマ字では *quau · qua · guan* のように表記されたが、『落葉集』はカナ表記にするために、たとえば「願」*guan* を「ぐあん」とすると「愚案」との区別がつかなくなるので、ローマ字を単純にカナ転写する「ぐあん」を避けて「ぐはん」と転写した。そのほうが、かえって当時の口語音に近づくことが出来たと論証した(佐藤進 2014)。

また、佐藤進 2014 では、『保元物語』の金刀比羅宮旧蔵の写本(岩波書店の旧日本古典文学大系の底本)には日本人にはそこまで必要がないほどの精密な振り仮名が施されており、その振り仮名の工具書として使われたのがハ表記の『落葉集』であったことを立証し、かつ、『落葉集』採用の理由が、欧人宣教師にとっては『保元物語』が日本語学習の良質な教材の一つとみなされたからではないかと論じた。

合口拗音ハ表記について、従来ほとんど見過ごされてきた問題ではあるが、『落葉集』と『保元物語』との関連、すなわち、欧人宣教師と軍記物語の関係を裏付けることが出来たように、文字文化事象の解明に資するところが小さくないのである。

## 二 毛利貞齋と『増続大広益会玉篇大全』

元禄第五壬申暦大呂中旬、すなわち一六九二年十二月中旬の刊記がある『増続大広益会玉篇大全』という漢字字書がある。宋代に改編された『玉篇』に、明代の『字彙』などによって増補し、漢字音や和訓を付した漢字字典である。なお、『玉篇』はもと梁の顧野王が五四三年に詳密浩瀚なものを完成させたが、中国ではすでに失われて、日本に原本の十二～十三%が残るのみである。それを原本『玉篇』という。宋代の一〇一三年に改編された『玉篇』の正式名称は『大広益会玉篇』とあって、大広益会と冠してはいるが、語釈や例文は大幅に削られて、原形をとどめない。

『増続大広益会玉篇大全』はその『大広益会玉篇』に増続した大全であるという意味になる。編者は毛利貞齋であることが、元禄第四辛未暦大呂穀旦、すなわち一六九一年十二月吉日の日付を持つ「凡例」（首巻に収録）に示されている。「洛澁隠士毛利貞齋編」。洛澁（ラクゼイ）は洛水のこと(注2)、本邦では京都の異名として書舗の所在地名などに使われた。「隠士」と自称するのは、官職につかず、講義や著述を業としていたからであるらしい。

毛利貞齋の生卒の確かなことは不詳である。貞齋と『増続大広益会玉篇大全』の書誌については、もと慶應義塾大学斯道文庫長・関場武教授の論文に詳しい（関場武 1977）。それによると、各種辞事典の貞齋の記事は、池永泰良『諸家人物誌』（寛政四年刊）の以下の記述を踏襲するという。

「毛利貞齋、名ハ瑚珀、字虚白、貞齋ハ号ナリ、浪花ノ人、京師ニ舌講ス、諸書俚諺抄ヲ著シテ梓行スルニ、皆自ラ筆ス、其敦厚ナルヲ見ツヘシ、著述甚富テ、業、宇遯庵ト雁行ス」

記述の最後にある宇遯庵とは、江戸前期の朱子学者・宇都宮由的（一六

三三-一七〇九) のことである。『先哲叢談』巻之四に伝がある。また、上の記述に続いて貞斎の著作三十二点を列挙しているという。

貞斎の生卒は不明ながらも、関場教授は貞斎の著述を刊行年順に考察して、その活動期間は延宝三年(一六七五)から享保十年(一七二五)に至る約五十年であったとしている(関場武1977)。してみると、元禄四年(一六九一)の『増続大広益会玉篇大全』は、十分に経験を積んで、しかも体力気力の衰えが見えない少壮の時期の仕事であったわけである。

『増続大広益会玉篇大全』は初版以来、(一)元禄五年版・後印二種、(二)享保二十年版・後印三種、(三)安永九年版・後印二種、(四)天保五年版・後印二種、(五)秋田藩明德館版・後印二種、(六)無刊記本二種、(七)嘉永七年版・後印十七種、(八)文久元年版、(九)明治五年版・後印二種、(十)明治八年版、(十一)明治十年版・後印二種、(十二)明治十一年版、(十三)明治十三年版・後印六種、(十四)明治十六年版・後印五種、(十五)明治三十八年版、(十六)明治四十二年版、(十七)明治四十四年版、以上のように多くの版を重ねた(関場武1977。なお後印の数については、関場武『近世辞書論攷』収録時に補充されたものを含む)。江戸明治の漢字字典と言え、まず『増続大広益会玉篇大全』に指を屈するのである。ちなみに筆者の家蔵は秋田藩明德館版の初印十二冊本と明治三十八年版洋装一冊本である。

### 三 『増続大広益会玉篇大全』の合口拗音ハ表記とワ表記

ここでは、『増続大広益会玉篇大全』の合口拗音ハ表記とワ表記を掲げる。手元では表組を作成したが、誌面の版式にはおさまりが良くないので、以下に簡条書き形式で示す。

クハ・クワ等の音読みの右、【】内に示したのが、その読みが与えられ

た見出し字である。ただし、該当するすべてを掲げたのではなく、使用例に乏しく、「与○同」とのみあって、○字の異体字であるものなどは、○字のみを採録した。『説文解字』の異体字とも言うべき「古文」「籀文」なども採録していない。

採録すべき文字で、ユニコードで入力できなかつたものもあるが、そういう僻字は十指に満たなかつた。省略しても差し支えがないものと思う<sup>(注3)</sup>。

採録字の右に（）で示した二字は、いくつかの読みがある中で、その読みが与えられた根拠となる反切である。まれに「音某」のような直音表記（非反切表記）もある。

【】の次につけたコメントは、誤刻等のメモである。

## ●果攝合口一等

### 平声戈韻

#### 見母

クハ【戈𪗇沓渦過痂芟𪗇（古禾）輻𪗇鍋鳩𪗇】

#### 溪母

クハ【𪗇擗料𪗇稿𪗇𪗇】

クワ【科窠】

#### 羣母

グハ【譌𪗇】

クハ【𪗇（音訛）訛𪗇】

#### 疑母

グハ【譌𪗇（午戈）】

クハ【𪗇（音訛）訛𪗇送（五禾）】

グワ【𪗇】

## 匣母

クハ【啣杯杯菜詠】

クワ【和禾穌】

グワ【禾（五叱）】

## 上声果韻

## 見母

クハ【孟稞縹纒孺裏襍鞞鞞鞞】

## 溪母

クハ【敕（口果）棵（苦果）牒穎】

## 疑母

グハ【睪】

グワ【厄】

## 曉母

クハ【火灰】

## 匣母

クハ【媧沃瓢禍睪衲駝】

クワ【夥甄烱】

## 去声過韻

## 見母

クハ【媧媧媧檜（公臥）詁】

クワ【過鍋】

## 溪母

クハ【媧媧媧緜葦課駝駝（口臥）】

## 疑母

グハ【臥】

曉母

クハ【泚貨】

匣母

クハ【絰】胡臥切を朝臥切に誤刻

クワ【和侘因】

●果攝合口三等

平声戈韻

溪母

クハ【儻駝】

疑母

グハ【梘趨鉞】

曉母

クハ【嘍靴】

クワ【吹】

匣母

クワ【鉢】

●假攝合口二等

平声麻韻

見母

クハ【厠別室划（公禍）歎洩焜焜（古誇）焜瓜焜蝸跗韻躡駟】

クワ【狐媧眇緇】

溪母

クハ【狐侷夸媧侷率（苦媧）誇媧韻】

疑母

グハ【攸】

クハ【脆】

曉母

クハ【批毗花醜】

匣母

クハ【琴憚找峯砉稗華藹蟬諱鏗關韠驂鑊鞞】

上声馬韻

見母

クハ【偶副凸另箇寗寗（古瓦）】

クワ【副寡】

溪母

クハ【跨侷垮跨轄鈞鞞】

クワ【中】

疑母

グハ【椀岷肱邱甄】

グワ【瓦硯】

匣母

クハ【嘸夙稞厖鮭蹀蹀（胡瓦）鰈鰈鰈】厖字、尸を戸に作る。

去声禡韻

見母

クハ【叱坻樺抓楓膈（古華）鮎】

溪母

クハ【中跨（苦化）踳踳踳】



曉母

クハ【叱華樺蒨愧】

クワ【化七】

匣母

クハ【響瓠瓠枇窳】

●蟹攝合口一等

平声灰韻

見母

クハイ【傀瓖愧（沽回）瓖瓖瓖（古回）鷗】

クワイ【瑰】

溪母

クハイ【匯（口乖）傀歛恢樅樅恢歛盃瀝諛闔（苦乖）麟魁魁魁】闔字、苦乖切を言乖切に誤刻

疑母

グハイ【桅（五回）阨（五回）鯢（午回）】

クハイ【鯢】

曉母

クハイ【咳旭拔輝穀浹旭灰爛（呼回）邪痕暉（呼回）蝮墮（呼回）豕鉤墮黠穉】

匣母

クハイ【徊回崑徊徊痾礮（胡乖）禪尙茨懷蛭裏迴邪邪駟礮】

クワイ【焯】

上声賄韻

見母

クハイ【掛（古拐）】

溪母

クハイ【峴摠擡硯顛】

疑母

クハイ【隗】

曉母

クハイ【梅燥魄磧】

匣母

クハイ【僣虜殍魔蒟誦（戸罪）黠（胡悔）戴】

去声隊韻

見母

クハイ【輓（古誨）憫憤梱箇】

溪母

クハイ【塊寃（苦對）蕘（音塊）】

羣母

クハイ【出】

曉母

クハイ【每晦沫洄誨頤頤顛】

匣母

クハイ【圍峴裏潰嚮硯繩荳（音潰）蝮誦讀遼閩霽（胡内）頤顛】

●蟹攝合口一等

去声泰韻

見母

クハイ【儗刳（公外）創々廡檜檜泝浮滄獐瘡檜（公外）檜膾檜鄣膾膾

鱈】

溪母

クハイ【檜髑】

疑母

グハイ【外】

曉母

クハイ【噦（火外）徼鉞（呼會）鉞】

匣母

クハイ【嶠旂會繪翹翹識醫（音會）逾】

●蟹攝合口二等

平声皆韻

見母

クハイ【乖痺痺乖】

溪母

クハイ【勅攏】

曉母

クハイ【囁豨】

匣母

クハイ【懷槐滾燹鞞】

クワイ【淮】

去声怪韻

見母

クハイ【卷啗怪拔攘菽黻缺鮓】

溪母

クハイ【副匍匐匍匐噴唱塊敲敲蒯蒯】

クワイ【箴】

疑母

グハイ【輿類顛】

クハイ【顛】

クワイ【瓊（五怪）】

曉母

クハイ【禦結】

匣母

クハイ【壞穢淫諳】

●蟹攝合口二等

上声蟹韻

見母

クハイ【朶（乖買）】

去声卦韻

見母

クハ【挂窞】

クワ【卦】

クハイ【空（古拜）硜（古拜）罍】

疑母

グハイ【類（五壞）】

曉母

クハイ【溲諳】

匣母

クハイ【逕纏（胡卦）罍瓌瓌】

クハ【畫調霽鞋】

クワ【畫（胡卦）】

●蟹攝合口二等

去声夬韻

見母

クハイ【夬瓌】

溪母

クハイ【噲快瓌】

疑母

クハイ【宥】

曉母

クハイ【狷】

匣母

クハイ【話】

●蟹攝合口三等

去声廢韻

疑母

クハイ【躡】

曉母

クハイ【殍瘵錄】

●山攝合口一等

平声桓韻





クハツ【**脛跼闊闊**】

クワツ【**筈**】

疑母

グハツ【**栴**】

曉母

クハツ【**窳姑科減減（呼活）瀦眠豁閭黠**】 減字、戍を戊に作る

匣母

クハツ【**活活括栝稻舳舻舻髡髻髻**】

クワツ【**酒**】

●山攝合口二等

去声禰韻

匣母

クハン【**幻**】

入声黠韻

見母

クハツ【**刮矚轔赳鶴**】

疑母

グハツ【**樞（五滑）明頭（五刮）矚**】

曉母

クハツ【**晤**】

匣母

クハツ【**右味晤馗馗滑猾確敌舻蝟蝟**】



●山攝合口二等

平声刪韻

見母

クハン【絲啗啣囁寰筭筭攔痕睥細罌羗（古關）鰓鰓關】

疑母

グハン【頑】

クハン【癩（五還）】

曉母

クハン【憊憊】

グハン【羸（呼關）】

匣母

クハン【剗環寰戛環蘆浚環賢還鍍鏗鏗闌鬣鬣鸚鵡】浚字、玉篇は于元切・于頑切の二切、クハンは『広韻』の獲頑切によるもの

上声澇韻

匣母

クハン【皖皖皖】

去声諫韻

見母

クハン【串信慣攢攢（公患）殞睥瞶芋（古患）輓遺鄴】

溪母

クハン【權】

羣母

クハン【權】

匣母

クハン【宦患湫隼隼部】

●山攝合口三等

去声線韻

見母

クハン【卷】

曉母

クハン【鞞】

●山攝合口三等

上声阮韻

見母

クハン【稹（九偃）】

去声願韻

見母

クハン【𦉳】「千」を「十」に作る

溪母

クハン【勸】

疑母

グハン【願願願願】

曉母

クハン【鞞】

入声月韻

疑母

グハツ【明月】

●宕攝合口一等

平声唐韻

見母

クハウ【光姚桃洸充擴廣珖眇趨軌驥馱】

クワウ【恍】

溪母

クハウ【奢硤鞞駝】

曉母

クハウ【帛幪忙暘荒獠甌統荒茫鄙鄺（音荒）碼駮駮】

匣母

クハウ【惶橫風呟惶惶惶冷辰徨惶惶演惶橫惶獠理璜矧廣皇盍眈徨篔簹  
惶橫統翌育肱臄躄惶惶惶蠱盍孟覘趨趨躄輶遑鄧鏗隍颺颺驥鯉鰭鵠黃臙躄  
穀鞞】 眈字、亢を充に作る

クワウ【程穰】

上声蕩韻

見母

クハウ【寃廣擴颯颯鷗】

溪母

クハウ【儻】

曉母

クハウ【趨翕恍恍暘熒（吁往）眈詭詭趨（虎晃）】 眈字、亢を充に作る

匣母

クハウ【幌幌幌晃暘暘幌幌（呼幌）瀟颯颯晃晃】

## 去声宕韻

見母

クハウ【擴曠】擴字、クハウは『広韻』古曠切によるもの、大全の反切は古莫切

溪母

クハウ【壙曠曠曠曠翫翫】

匣母

クハウ【緝鏡】

## 入声鐸韻

見母

クハク【嶲慶澹郭（同鄣）鄣曠鶴】

クワク【犇】

溪母

クハク【劇（口郭）劓郭廓鞞（同鞞）鞞鞞】

クワク【劓】

曉母

クハク【擻矐矐矐矐矐矐矐矐】

匣母

クハク【鞞懷樓（胡郭）漚漚啍獲獲獲獲獲（胡郭）獲獲】

## ●宕攝合口三等

## 平声陽韻

見母

クハウ【兗（呼汪）癸】

曉母

クハウ【兗（呼汪）邠】

匣母

クハウ【鄭】

去声漾韻

見母

クハウ【誑（俱放）贗】

溪母

クハウ【續】

匣母

クハウ【帷】

入声藥韻

見母

クハク【攬椋瀆（枯鑊）厠稷聊輶鐘鏗鸚】

溪母

クハク【窳鸚】

曉母

クハク【攬瞞】

影母

クハク【蝮（於縛）】

●梗攝合口二等

平声庚韻

見母

クハウ【吡橐罌膜鱗鱗鱗雲訛諠鱗】

曉母

クハウ【洵翳颯】

匣母

クハウ【曠惶橫潢竝橫諠鉉鉉鑠鏘颯颯】

上声梗韻

見母

クハウ【磳磳鑿】

去声映韻

匣母

クハウ【嶭】

入声陌韻

見母

クハク【斲職讖越（霍號）】

曉母

クハク【割慄擗】

●梗攝合口二等

平声耕韻

見母

クハウ【腰】

曉母

クハウ【匍掬確錡】

匣母

クハウ【宏嶠恂沓潢磁磻宏絃絃聃】

## 入声麥韻

## 見母

クハク【𦉳𦉳𦉳𦉳】

## 曉母

クハク【𦉳𦉳𦉳𦉳𦉳𦉳𦉳𦉳 (呼麥) 𦉳𦉳𦉳】

## 匣母

クハク【𦉳𦉳𦉳 (胡麥)】

クワク【𦉳 (乎麥)】

以上は中国音韻学で合口とされるものの調査であるが、開合の扱いで、以下のような相違もある（下の諸字はデータに含まれない）。

開口を合口扱いしたもの。

クハイとする麋字の反切は苦海切となっており、音韻地位で示せば「蟹開一上海溪」であって、開口カイが正しい。

鶴字は何各切、音韻地位では「宕開一入鐸匣」であって、開口カクである。したがってカクとするのが多い中、これを貞斎はクハクとする。合口扱いにしてクワクにするのは、室町時代の文明本『節用集』であり（中田祝夫 2006）、クハクとするのが『落葉集』である。特にハ表記の后者は注目に値する<sup>(注4)</sup>。

合口を開口扱いしたもの。

カ癩、カツ鋸、キヤウ匡筐匡狂、ケイ圭（圭を声符にもつ奎・桂・畦・閨なども）、ケイ攜惠慧、ケツ決訣缺血穴厥厥掘（クツも）擲、ケン犬玄懸縣眩、コウ弘、などはいずれも合口であるが、貞斎は開口のカナをつけている。

さて、採録データをみてみると、ハ表記は一〇三六文字、ワ表記は五五

文字であった。つまり、九五% がハ表記、五% がワ表記である。非常に明確な傾向で、ハとワの「揺れ」というには偏り過ぎている。『増続大広益会玉篇大全』の合口拗音については、原則としてハ表記であり、時にワ表記が混入したと言って差し支えない。

#### 四 『増続大広益会玉篇大全』の合口拗音ハ表記のよって来るところ

毛利貞斎は『増続大広益会玉篇大全』における合口拗音の漢字音表記に際して、該当字の九五% をハ表記にした。

貞斎の「凡例」には、音訓の付け方について「予 贅する所の音訓、舊本の反切（ホンゼツ・カヘシ）註釋に根（もとづ）く」という。旧本の反切というのは『大広益会玉篇』のことである。ただこれは原則論であって、たとえば緩字の場合、『大広益会玉篇』は于元切・于頑切の二切なのでエンとなるが、その上、貞斎は『広韻』の獲頑切によってクハンの読みを加えた。ただし、その反切は追加していない。それはともかく、これだけ多量の漢字に音と訓を与える参考文献は、今日なら『類聚名義抄』や『色葉字類抄』や文明本『節用集』などの古写本の影印本が利用できるが、江戸前期ではそうも行かない。当時であって貞斎が参照した漢字音つきの字書類は何だったかを考えたい。

音読み訓読みを添える『玉篇』がらみの字書としては、室町時代に盛行して、江戸時代に整版が刊行された『倭玉篇（ワゴクヘン）』がある。岡井慎吾 1933 には写本刊本四十数点の紹介がある。また、岡井慎吾 1934 には、江戸時代の刊本には三十数種類あるとの報告がある。ただ岡井博士の報告は戦前の調査であって、戦後のものとしては中田祝夫・北恭昭 1966 に、写本三十数種、刊本九種（後で紹介する『小玉篇』を含む）が現存す





クワイ 【魁岐邨鄗頤禴】

クワウ 【蝗遑隍窳蝗】

クワク 【蠖鄗】

クワン 【蛄貳贅嚙宦官寰窳】

以上のように、二群に大きく分かれ、ハ表記を原則としたとは言えない。貞斎の編集方針のモデルになったのは、夢梅本を含めて『倭玉篇』ではあり得ない。

『玉篇』を名乗る先行字書にこだわる必要もあるまいとは思いますが、最後に、『落葉集』に含まれる『小玉篇』に着目してみたい。

『小玉篇』は『落葉集』の附篇として、いったん本体が出来てから編集印刷されたものである（土井忠生 1971）。現存する『落葉集』の諸本六点、断簡二点については土井洋一 1986 が詳しいが、現存諸本六点のうち『小玉篇』を含むのは、ローマイエズス会本部蔵本・大英博物館蔵本<sup>(注6)</sup>・スコットランドクロフォード家蔵本・天理図書館蔵本の四点である。

『小玉篇』の冒頭にある前書きには、その編纂意図を次のように述べている。

「右落葉集は字のこゑを用ひていろはをついで、色葉字集はよみを以て記すれば、読こゑを知て字のすがたをしらざる時の所用をなすといへども、文字のかたちを見て其よみこゑをしるに道なき便として、右両編の内より今又此せばき玉篇を編畢」

『落葉集』の本体とも言うべき本編の音読み（＝こゑ）いろは順「落葉集」と訓読み（よみ）いろは順「色葉字集」に出現する漢字を、字形から検索が可能なように、改めて部首順に配列したものである。「せばき玉篇」つまり小さな玉篇と、へりくだった命名をしたのは、「分量の軽少と卑下の意をこめて」のことであるらしい（土井忠生 1971）。「分量の軽少」とはどれくらいのものか、手近な解説書類には具体的な字数を掲げないので、

いま倉卒にカウントしてみると二三三三三であった。室町時代にキリスト教の布教に役立たせるための常用字として考えると、現代日本語の常用漢字の字数、二一三六字の約一割増であって、かなり妥当な収録字数であると言える。なお、部首の数は一〇四、一〇五番目には配属の厄介なもの一九五字を「類少字」としてまとめている<sup>(注7)</sup>。

その二三三三三の中で、合口拗音字は下がすべてで、一貫してハ表記を採り、ワ表記は皆無である。なお漢字の字形は『落葉集』では行書体で印刷された。

クハ【瓜戈火花咄貨禾科果菓課誇袴掛禍鍋過瓦】

グハ【臥】

クハイ【灰徊廻槐塊会鱒絵怪懷贖悔晦】

クハウ【光荒皇遑広】

クハク【郭鶴】

グハチ【月】

クハツ【活滑】

グハツ【月】

クハン【串官管棺冠翫関寛貫鐘環卷換喚緩観飲】

グハン【欲頑丸願】

大切なことは、「揺れ」がなく、100%がハ表記であるという事実である。その編集方針が、毛利貞斎の九五%ハ表記に影響を与えたのではないかと考える。

どういう表記を基準とするかということが決まれば、あとは『大広益会玉篇』や『字彙』の反切に従って音読みを与えるだけである。『落葉集』は稀覯な字書ではあったが、幕末にアーネスト・サトウが江戸の古書肆で求めることが出来たように、江戸前期に入手が全く不可能であったとも思われぬ。確かな記録はないが、貞斎は『小玉篇』を筆写して参照したと

も想像できる。

前章の最後の部分で、本来の開口を合口扱いした例として鶴字を挙げた。合口扱いにするだけでも決断を要する問題である上に、数ある古字書の中で、合口で、しかもクハクとするのは『落葉集』が唯一である。身近な漢字であるだけに、『落葉集』と貞斎の間に強い紐帯を感じざるを得ない。

## 五 『増続大広益会玉篇大全』合口拗音ハ表記のその後

元禄五年に世に出た『増続大広益会玉篇大全』は、先に紹介したように、江戸明治を通じて数多くの版が行われた。そうとなれば、その後の合口拗音ハ表記が世上に大きな影響を与えたと考えて不思議はない。実際はどうであったか。

まず、『増続大広益会玉篇大全』刊行後の貞斎自身の漢字音研究に、三点の『韻鏡』の研究刊行があった(福永静哉 1992)。福永静哉 1992 には一章を設けて貞斎の『韻鏡』研究を分析しているが、そこに収める『韻鏡袖中秘伝抄』の「直音拗音七音配當圖」を見るにクワ表記を採っている。当時、『韻鏡袖中秘伝抄』に先立つ数多くの『韻鏡』研究書が存在した由で、恐らくはそれらのワ表記を踏襲したものと思われる。

安永五年(1776)、本居宣長が『字音假字用格』において漢字音の在り方を論じて、後世に大きな影響を与えた。そこでは合口拗音ハ表記について「下中ノわ之假字」という項目を立てて以下のように述べている。「わくわ くわう くわい くわん くわく くわつ、右ノ諸音凡テわノ假字ナル事、上ノ第三會ノ圖ニテ明ラカ也、はノ假字ヲ書クハ大ニヒガコト也【凡テ三字ニ書ク字音ノ中ノ假字ハ、喉音ノや行わ行ノ字ニ限レルコト也】」(大野晋 1975)。ハ表記は「大ニヒガコト也」として退けられた。

本居宣長の批判によってハ表記は姿を消したかということ、事態はそれほ

ど簡単ではない。たとえば、安永九年（1780）、都賀庭鐘の校訂で『康熙字典』が翻刻刊行された（都賀の「序」は安永戊戌七年）。この『康熙字典』は単純な翻刻ではなくて、見出し字に漢字音を付し、本文に訓点を加えて刊行された。その合口拗音については、一貫してはいないがハ表記が見られるのである。たとえば、官クハン關クハン、一方、光クワウ廣クワウ。

また、元禄九年初刊で、江戸明治に盛行した単字字典『文選字引』というものがある（山田忠雄 1981）。その中にも、丸グハン乖クハイなどが見られ、一方、串クワン光クワウも混在する<sup>(注8)</sup>。ちなみに、鶴字は『康熙字典』カク、『文選字引』クハクであった。

翻刻『康熙字典』や『文選字引』などについては興味が引かれるが、その全面的な調査報告は次の課題にしたい。

## 【注】

- 1) 十六摂・開口合口・四等・四声・二百六韻・三十六声類という枠組みであるが、具体的には、語言研究所 1981 によった。ちなみに、この枠組み「摂・開合・等・調・韻・声」を用いて、ある漢字の音韻情報を定義することを「音韻地位」という。例えば「家」は「假開二平麻見」と表す。個々の漢字発音の方言差異などを表現するときに便利である。
- 2) 「洛澁」は鄺道元『水経注』卷十五「洛水」に「南據嵩岳、北帶洛澁」と作る対句に出てくるものである（「九山廟」前の碑文の一部）。「嵩岳」に対する「洛澁」なので「洛水」と考えて間違いない。ちなみに、貞齋のほかの著作では「洛汭（らくぜい）」「洛下」とも書かれている（関場 1977）。
- 3) ユニコード以外の文字はかなり少ないが、食部には例外的に多く、声府だけをメモしておく、隶・科・黄・過・裏の五文字。
- 4) 中田祝夫 2006 によると、文明本『節用集』は名家に長く秘匿され、明治になってようやく存在が知られ、国語学者の目に触れるようになったのは戦後のことだという。現在は国立国会図書館に蔵され、デジタルコレクションで閲覧と画像のダウンロードが出来る。ちなみに、中田祝夫 2006 の「索引」は編者が「序」において「不備があり」「粗慢」だと断るように、単字の音読みですら遺漏が散見する。ここで取り上げた鶴字についても二箇所でクワウの読み仮名が確認できるが、「索引」には採録されない。それはともかく、江戸時代にはまったく世の中に知ら

れなかった文明本『節用集』の影響力はほとんど無視してよい。

- 5) 夢梅は易林本『節用集』の編者・易林と同一人物である（中田祝夫・北恭昭 1976）
- 6) 駐日公使アーネスト・サトウが江戸で購入し、一八八三年に大英博物館に納品された（福島邦道 1977）
- 7) 部首の数を一〇四としてあるが、第二十四番は欠番になっていて二十三から二十五に飛んでいる。したがって、本当の部首数は一〇三である。
- 8) 『文選字引』は家蔵の享保一九年（1734）初刻の安政二年（1855）九刻本によった。国立国会図書館デジタルコレクションに公開されている明治五年版も同様である。

## 【参考文献】

- 大野晋 1975『本居宣長全集第五巻』筑摩書房
- 岡井慎吾 1933『玉篇の研究』東洋文庫
- 岡井慎吾 1934『日本漢字學史』明治書院
- 語言研究所 1981『方言調査字表』（修訂本）商務印書館
- 小島幸枝 1978『落葉集総合索引』笠間書院
- 佐藤進 2014「金刀本保元物語の合拗音振仮名と『落葉集』」（『源平の時代を視る』思文閣）
- 関場武 1977「毛利貞齋編『増續大廣益會玉篇大全』」（『藝文研究』36（いま関場武『近世辭書論攷』慶應義塾大学言語文化研究所 1994 に収め、その後の調査による諸本の補充がある）
- 土井忠生 1971『切支丹語学の研究（新版）』三省堂
- 土井洋一 1986「解題」『天理図書館善本叢書 落葉集二種』八木書店
- 中田祝夫 2006『文明本節用集研究並びに索引』勉誠出版
- 中田祝夫・北恭昭 1966『倭玉篇研究並びに索引』風間書院
- 中田祝夫・北恭昭 1976『倭玉篇 夢梅本・篇目次第 研究並びに総合索引』勉誠社
- 日本語学会 2018『日本語学大辞典』東京堂出版
- 福島邦道 1977「キリシタン版落葉集解説」『キリシタン版 落葉集』勉誠社
- 福永静哉 1992『近世韻鏡研究史』風間書房
- 山田忠雄 1981『近代國語辭書の歩み（上下）』三省堂